

第4分科会 人権確立をめざすまちづくり

部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざすまちづくりをどうすすめているか

①分散会

I はじめに

この分散会に参加する人たちの想いや願いが分かり合え学び合えるような会にするために①被差別当事者の想いを分かろうとする取組をとおして、知ることができてこんなに良かった、こんなことを考えるようになった、こんなふうに変われた…そんな学びを交流しよう。②ありのままの自分を語る、そこにあった差別と向き合えたこと、家族・職場の仲間や友だちと想いを確かめ合ったことでうれしかったことを交流しよう。③自分にできることを自分らしく、地域の仲間と一緒に小さくても工夫して取り組んでいること、こんなことを始めてみたいということを交流しよう。という3つの討議の柱を提案し、報告討論に入った。

II 報告および質疑討論の概要

—報告1—⑭

地域教育コミュニティの創造と活動～この町、そして自分のために～ (高知県人教)

—主な質疑と意見—

愛媛 行事の運営費はどうしているのか。消防団に入っているのか。青年団活動が消滅してしまっている。長続きしている秘訣を知りたい。

報告者 運営費に関しては、出店している売上げで賄っている。消防団には数名入って活動している。長続きさせるのは、地域の色があるが要は気持ちでないか。つながっているから親の世代から子の世代に自然と語り継ぐ受け継ぐという流れができています。

高知 同じ青年団で活動している。運営費に関しては売上げのほかに公民館や地域活性化推進協議会からも支給されている。長続きさせるには、新しいメンバーを加えていくことが大事になってくる。個人では限界があるので学校との協力関係を大切にしている。学校が青年団の活動を子どもたちに伝えてくれ、子どもたちが青年団のことを知ってくれる。それが自然と子どもたちの自主的な参加につながっている。

高知 小学校に赴任してきて、地域に入り触れあい教室でイベントに参加していくなかで、青年団と出会った。そこで地域で活動している青年団と子どもたちをつなげようと、青年団を学ぶ学習を

4年前から取り入れた。青年団に来てもらって、活動を実際に体験しそれを全校の場で発表している。他学年でも、1年生で児童館に行ったり、4年生の解放太鼓で青年団とつなげながら地域に学ぶ学習をするなど、青年団が小学校の地域学習に入り込んでいる。教員も様々なイベントに参加し協力するなかで、子どもをとおして地域と学校がつながっている。

愛媛 子ども会の保護者が、自分たちは結婚差別にあったが子どもたちには同じ思いをしてほしくない、知らずに過ごせるのならそうしたいと思っている。子どもたちがどのようにして立場を自覚していくのか、青年団活動の中でどうかかわっているのか。

熊本 イベント等では一生懸命活動しているが、終わった後の日常生活の中で、青年団が青年団に入っていない人たちとどんな関わりを持っているのか。

報告者 子どもたちに改まって伝えるということはやっていない。自分たちの時は子ども会活動の中で親世代から学んだ。これからの子どもたちにどう伝えていくかは課題だと思っている。自分たちが青年団として地域でやっている活動を通して感じ取ってほしいし、学校とのつながりを大事にしながら学習の場をつくってあげたいと思っている。

地域の行事、イベントで活動している姿を見てもらうだけでも何らかのアピールになっていると思う。自分自身地域で育って、青年団活動している仲間も一緒に育ってきた人が多いので、地区出身ということも自覚している。

鳥取 青年団が弱体化している中で、しっかり活動されている。自分のところも、地区学習会、子ども会活動に取り組んできたが、現在少子高齢化の中で、学習会や子ども会の規模が縮小している。兄弟だけという子ども会もある。社会的立場の自覚についても、過去は仲間の力で立ちあがれたが、集団が小さくなって子どもたちに負担がかかっている。そこで、子ども会や学習会の規模、状況がどうなってきたのか聞きたい。

報告者 6年前から太鼓に取り組み文化祭等で叩かせてもらっている。発表の中で、子どもたちが、「かっこいい。叩いてみたい」という。自分たちは小さい時から太鼓をやってきた。子どもたちが興味を持ってくれることが自然とできてきているというのが今の青年団の一番いいところではないか。自分たちがまずやってみて、次に子どもたちにやって、興味を持てばそれを続けていくという感じ。自分たちのやりたい活動が、子どもたちの興味とつながったことが良かったのかなと思う。

兵庫 いま議論していることは我々の責任であると思っている。若い人が頑張っていることがすごいと思う。対策事業がある時は、どこの子ども会も財源的な保障もありやってこれた。そういう

時代からそれぞれのまちづくりが変わってきた。そのなかで今、私たちが何をやるかの時代を迎えた発表だと思う。行政と運動体との関係、学校、周辺地域との関係をどう結んで、らしさを持ってやるかという時期に来ていると思っている。

卒業した子がいろんな所に行っている。そんな子が盆踊りに帰ってきて、練習もせずに櫓に上がる。それがまたかっこいい。三味線も弾かせてとって音合わせもせずすぐできる。そういう子が3年前から出てきている。今発表を聞きながら、その子たちを三味線、太鼓をきっかけに集まりを考えている。私らが培ってきたものと若いものをもう一回つないでやらないかんと思って二人の発表を聞かせてもらった。

愛媛 公民館に所属しているが、イベントに青年団に参加してもらおうと本当に助かる。地区は甚大な災害を受けたが、県外からもボランティアが来てくれた。青年団として被災地でのボランティア活動があれば聞きたい。

高知 自分自身は東日本大震災の時岩手県の大船渡市に復興支援で行った。その時に出会った醤油会社のお父さんと今でもかかわりを持っている。地元に戻ってその醤油会社の醤油を売って1本につき百円を大船渡に寄付するという活動をやった。最初はたくさん買ってくれたが、少しずつ風化して赤字になってきた。一度できた縁とやろうと思った僕らの思いを消すのもどうかということから、焼き鳥を考えた。それでこれからはずっと関わり寄付を続けようと考えて、この醤油で自家製のたれをつくってやり続けている。何か少しでも自分たちにできることを考えながらやっている。

—報告2—⑳

また、会館に相談してもいいか？～Aさんとの関わりをとおして～ (滋賀県人教)

—主な質疑と意見—

熊本 会館以外のプライベートで日頃どのように関わっているのか。

鳥取 Aさんのような悩みや不安を持っている人はたくさんいる。会館だけの対応では難しい面がある。相談窓口はたくさんあるほうがいい。卒業した子どもへの継続的な支援ができてない現状があり、相談窓口になれる取組を模索している。相談窓口を広げることについてどう考えているのか。

香川 小学校時代の心の傷があって区域外の通学をしているということ、交友関係について事情を聞きたい。お母さんの再婚等家の事情が複雑なようだが、背景を聞きたい。

報告者 Aさんとの出会いは中学校入学時。前任校の校区を巡っていた時、たまたま不登校だったAさんが釣りをしている声をかけてくれた。その時一緒に釣りをしながら話を聞いた。会館勤務になってからは、Aさんとプライベートで何かしたということはない。

小学校からの申し送りでは、いじめにあって不登校になったとのこと。中学校でも欠席が増える心配だということで気をつけて見ていこうと考えていた生徒だった。保護者も交友関係を心配して来校し相談があった。

家庭状況については非常に複雑で、現在は母親とは離れて暮らしている。

滋賀 H中学校区で働いているが、保小中館連絡会というのがある。月2回館に集まって情報交換をしている。校種がまたがっている家庭も多く、子どもの様子、家庭の様子を出し合う中で、連携した取組ができている。子どもたちは交流しやすい環境にあり、卒業した学校を身近に感じている。

愛媛 Aさんが前向きになった背景が大事だと思うので、何があったのか教えてほしい。

報告者 Aさんが来館した時に、交流事業として学童保育事業を会館でやっていた。その中の次世代リーダーの育成事業で育った子が指導者として帰ってきて子どもたちと関わってくれる。その事業にAさんと同居をしていた母親の妹が指導員として20日間ほぼ休まず指導に当たってくれた。その学童保育の期間中にAさんが照れ臭そうに入ってきた時に頑張るといふ発言が出てきた。家族が頑張っている姿が頑張ってみようという気にさせたのでないか。

奈良 Aさんの姿が分かりにくい。「玄関前の乱れた様を見て」とか、「学校に来られるだけでやつのことでないか」とか書かれているが、この子が小学校、中学校をどういったかたちで過ごしたのか、家庭が複雑であったというのは分かるが、Aさんの育ってきた中身を聞かせてほしい。

報告者 Aさんの精神的な支柱はこの家の柱でもあるおじいさんに当たる方。Aさんは困ったことがあると、家の人に強く言うってもらうことで、問題を解決しようとするようなところがあった。きちんと話を聞いて、相談するところはきちんと相談して、問題を解決していこうということを目指して取り組んでいる。普段自分の話を聞いてもらえていないというところがとても気になっているので、Aさんにもっともっと話してもらって、引き出していこうという関わりを小学校の先生もしていたし、中学校でもそうしていた。Aさんの話をきちんと聞いていくという積み重ねで、少しは話せるようになってきたと思う。しかし、まだ自分の心を開くということまではいっていない。

高知 「厳しい差別の現実が残っている」と書かれているが、報告からは差別的な部分を感じ取れなかった。具体的にどういった点で差別をされていると思ったのか、また、差別をされているAさんにどんなサポートをしたのか。

報告者 Aさんの交友関係が心配。同年代となかなかつながれない。小学生の低学年から高学年の子と一緒に遊ぶという状況。Aさんに小学生と遊ぶ理由を聞いたことがある。同級生とうまく関係

がつくれない、小学生なら遊ぶことができるということだった。よく見ていると、同年代の集まりでは、ペアになる場面など外されがちになる。町内の同級生でも、Aさんを見る目に厳しいものがあるのではないかとということで、高校生の交流会とか学習会に声をかけて誘っている。同級生や友だち誘ってくるというところまでいかない。

熊本 町から議員として参加している。教員は、自分の環境の中での対応しかできない。Aさんが報告者と話をしている、その範囲の中での話になる。Aさんが付き合っている子が年下の子であったりするのは、Aさんが自分を出せる環境がそこにあるからだと思う。平成4年には私の所で差別発言があり糾弾会があり、私は糾弾を受けた。そういった中で私は極めようという学習会に来ている。教材としてAさんを見ていないか。お互いが心を開かないとAさんが報告者に心を開いてくれない。会館の職員としてだけではなく一人の男として話をしたほうがいいと思う。

協力者 隣保館に勤めた5年間私を大きく変えるきっかけになった。教育現場だけだと気づかないままの教師になっていたと思う。報告者自身がAさんを含む地域の子どもたちやそこに住んでいる人の思いを足を運んで聞くことが大事だと考えている。報告者自身がAさんと関わることによって変わったこととか、今現在考えていることを聞きたい。

報告者 会館で働く中で、ありのままを受け入れる心の大きさ寛容さ、なかなか真似のできないものがある。教員の世界は考え方が固いし、まだまだやったつもりになっているだけ。地域で子どもたちを長い間見ている人は受け止め方が全然違う。もっともっと学ばしてもらわないといけない。気づかせてもらうことが多い。

兵庫 識字に行っているおばちゃんたちと清掃の仕事をしている。その職場に26歳で6年間家から出たことのない子をお願いされた。難しいと思ったが来てもらって一緒に清掃していこうと、会館で朝一時間から始めた。人と会うのが怖いということで、会館の職員が来る前にくる。一年ほど仕事していて、いつどこでどんな人との出会いが心を病んだかということ、私との関係で彼の方から言ってきた。「5千円借りて返そうと思っている頃引きこもりになってずっと返せなくて、その子怒ってるんかな」という話だった。「お金を貸すということは信頼関係。その信頼を裏切ったら、私は約束やから絶対とる。でもとる時の気持ちりがどれだけ苦しいか、こんなにしまで返してもらわなアカンのかと残念な気持ちになるんよ」と言うと、その子はふっと顔色変わって、「もう一回電話してみる」と言った。その後、電話が通じて「遊びに行こか」言うてくれたんやと泣きながら言ってくれた。こっちから聞きだそうとしても言いたくない時は難しい。言いたくなり「聞いて」という時間が何回か取れた。そんな一個一

個の積み重ねが大事。

滋賀 私も教員で隣保館に派遣されていた。隣保館に教員が派遣されているのはどこの県でもあるのかと思っていましたがそうでもない。4年間で得難い経験ができた。学校から見ていた子どもたちの様子と地域に帰った子どもたちの様子、家庭での様子というのが違う部分が多々あった、そのことが学べたこと。その子どもたちを通していろんな人とつながりができ、地域の人から昔の差別の話も聞いた。そこから学ばしてもらった。会館勤務の先輩からは、会館は人と人をつなぐところやと教えてもらった。「のんびり会館に座っとたらアカンで、どんどん出かけていきや、ムラの中に入りや」と言われた。高校やその後の姿は中学校教員はなかなか見られないが、会館では、高校卒業後も継続して見ることができる。それをいろんな人に伝える活動にも関わった。考え方は違っても部落解放のために闘っている実践ではつながっていけると思う。

まとめ

糾弾という言葉が出てきたので、そこを押さえておきたい。昔は厳しい部落差別に対して被差別部落の人たちがなんら手段的なものを持っていなかった。そこで差別発言が起こった時に、何もしていないで差別が拡大してしまう。そこはきちんと押さえて何でそういう差別が起こったのか、これからどうやって差別発言を自分の学びとしてどんなふう展望にしていくのかということをやっていくのが糾弾学習会である。法務省でも位置づけがされていて糾弾は認められていた。糾弾会が行われ、その結果としてこういう学習会に参加してくれている。そこでの糾弾会がよかったんだと思っている。

鳥取から、卒業した後に継続的な支援が出来ないというのは、先生たちが持っている一番心配で不安なことであり、地域の課題でもあると思っている。そのことをどういうふう地域教育力でカバーしているのかというのがそのまま人権のまちづくりになると考えている。例えばAさんにとって頼れる場所は会館であったし、報告者だった。その後、次の先生がAさんにどう関わってくれるか。そこを行政、団体がつないでいける取組をしていくには人と人がつながっていないと相談できる場所もないということになる。Aさんをここまでほったらかしにしていたものは何かということと、どうやったらほったらかさないでAさんと関わり続けていけるのかが課題である。

子どもにどうやって知らせるのかという問いに、青年団の方が自分たちの活動を見てもらう中で子どもたちに感じ取ってもらいたいと答えていた。差別をなくす主体者として様々な活動をしている。「自分たちの活動が楽しいと思わないと子どもたちに響かないんじゃないか」という言葉が心に残った。子どもたちが「かっこいいな」と

か、「楽しそうだな」という興味とか好奇心が自分の地域に誇りを持つということにつながっていく。そしてそのことが大きくなった時に自己実現していく力になっていくということが確認できた。大人の背中を見せるということが子どもたちの将来になっていくということが2本のレポートを通して感じた。

—報告3—③

地域と学校が創り上げ運営する3つのプロジェクト～みんなの社会力向上を目指して～

(奈良県人教)

—主な質疑と意見—

福岡 子どもたちが生き生きと活動している姿、まちの人とつながっている姿が想像できた。①対象を4年生から6年生にした理由。②どのような分析をしてどのような基準でプリントを作成しているのかももう少し詳しく。③職業体験イベントをどのような枠で実施しているのか。

愛媛 地域貢献でポイントカードがもらえるということだが、個人で地域行事に参加してもらえないのか。

佐賀 財源について、一口千円の年会費で募集しているということだが、これで足りているのか行政との関わりはどうか。

香川 行政との関わりはどうか。図書館が荒れていたという部分についてスクールソーシャルワーカーとか図書館司書の関わりについて。県営住宅や市営住宅の人が多いということは人と人のつながりが難しいと思うがどうつながっているのか。隣保館と学校との連携はどうか。

報告者 対象を4年から6年に絞ったのは、家に帰ってから一人で来られる学年ということ。プリント作成については、学力テストがしんどかった。算数は計算や基礎的なことを1年生から6年生までの大事な計算問題プラス発展問題で、正答率の悪かった問題のパターンを調べてつくった。中学校から漢字の勉強をさせてほしいと要求があったので、1年生から6年生までの全部の漢字をマスターできる50枚くらいのプリントをつくって繰り返し繰り返しやる。その結果入学テストが毎年10点ずつ上がっているといわれた。

職業体験イベントは、子どもたちにアンケートをして、地域の人を当たって誰が呼べるかの目星をつける。プロフェッショナルの講師を招へいするとお金がかかる。そこで夢応援プロジェクトを地域に移行し学校もそこに会員として入っている。協賛金を求めている。地域に委ねたことで財源が広がっていった。夏休み冬休みは卒業生の大学生、高校生をバイトで一日塾長できてもらっている。

赴任した時、前任校長から言われたのは団地の子たちの荒れとか揺れ、だからこそ地域みんなまで応援する。旧村のずっとこの学校にいた人だけを大事にしようというのではなく、この地域に新しく入ってきた人たちもみんなまで応援するんやとい

うことで区長会も団体加盟してもらっている。

隣保館は隣の小学校区にある。子ども会は隣の小学校区なのでほとんどが隣の小学校に行ってしまう。だからこそ余計にこだわって人権教育を中心に授業を組み立てている。

図書館司書は学校の職員がかねており今のプロジェクトチームに入っている。スクールソーシャルワーカーも希望すれば来てもらえるが、うちでは人権教育推進担当がスクールソーシャルワーカーの役割をしている。

イベントは夏休み冬休みになるべくできるようにしている。プロフェッショナルの希望で日曜日になることもある。

学校行事でなくても参加できるようにしたのは、学校がやっているんでなく、地域が君たちに感謝して、地域の塾に君たちを招待していることを意識づけるため。今年からボランティアをしたらもらえるポイントをつくった。個人のボランティアや地域の行事に参加してもポイントが貯められる。

三重 このプロジェクト以外に人権教育の取組の話があったが、校区にいろんな被差別の立場の子どもたちがいると思う。地域の中の被差別の思いとかを知ってほしいとか、このことが人権を大切にするつながりになっていくといいなとか、具体的な例があれば教えてほしい。

滋賀 地域貢献活動に行くこと自体が困難な子もいるのでないか、そういう子にどういう配慮や対応をしているのか。

三重 それでもこぼれていく子やどうしても関われない地域に、教職員を含めて取り組んでいる中で課題になったことやそこにどういうアプローチをしたのか具体的などころを教えてほしい。

報告者 反差別の思いが共有出来たらというのはこれからの課題である。学校に二つの人権教育大綱の柱ができた。今まで人権教育が不毛だったところに人権教育をもちこもう。学校を変えようということで、今、識字と食肉にこだわって教材化をしている。夏休みの研修で水平社博物館に行った。奈良県にあるにもかかわらず行ったことのない職員が半数いた。水平社宣言を知らない若い職員が3割いた。食肉のことも全く勉強したことがない。そこでもう一度新しい世代が部落問題学習を創っていこうという段階。

まだ、樺本プロジェクトと共有はできていない。どう合体していくのか棲み分けしていくのかを模索しているところ。具体例として『町カ塾』に子どもたちが来るときにはならず職員は覗きに行く。教室で学年でこの子こそという子が来ているかどうかを確認する。6年生でしんどい思いをしている女の子で、お父さんがその子の前で自死をしてしまうということがあり、夏休みに手首を何度も切る、拒食症になって20キロ台に体重がなる。そんな子こそ来てもらおうということでアプローチをし、9月に担任が誘おうと家庭訪問

をするとその子は友だちと誘い合わせてきていたということがあった。

ほったらかしにされる子ほど習い事が多いという傾向がある。親の負い目を習い事をさせることで、何とかしっかりしてほしいという願いがそこにあるのかなと思っている。当たり前なことだが何かあったら家に行こう、「電話5分する間があったら走ってこいよ。家の中でどんな顔してるか見てきたらええねん。玄関でかまへんから、閉まってたら来ましたってメモ入れとき」。そうやってどの子こそがワクワクして学校楽しみに来てくれるんか、よかったなあと言って帰ってきてくれるんか。学級や授業研究の柱にどの子こそするんや。その子が自分のクラスでどうやってるのか親はどんな願いや要求を持っているのか、それを一人の人間として襟を正して聴けるのか、ということを中心にしていこうという、一人もほったらかしにしない授業を目指している。

高知 教職員みんながどんな感じで一丸となって取り組めるようになったのか聞きたい。

熊本 学校の中で意識改革をどう図ったのか。校区がまたがっているという話があったが、隣の学校との連携や小中の連携についてどんな展望をもっているか。

報告者 4年前に赴任した時は職員が仲悪かった。一人一人面談してどんな学校にしたいと聞いたたら、校務員さんは子どもたちが掃除をする学校。掃除の時間だれも掃除しない、あっちこっち壊れる。今はトイレきれい。下駄箱の靴見事に並ぶ。職員に聞いたら、内緒話しない学校。みんなが職員室に下りて来なくて、階段の踊り場でひそひそ話をして、「またあそこの学年つぶれそうやで」という話をする。5年以上6年生が複数学級崩壊をする、職員も複数特休を取るというのが続いていた。ほとんど転勤希望ばかり。そこで自分たちの熱い思いを一つにしよう、緊急事態をチームで対応しようベクトルを合わせようとみんながホットラインチームというのをつくった。その中心が校長ではなく人推教員。チームのリーダーになってくれて、若い先生がその人推教員を募っている。決して校長ではない。彼が中心になって一番しんどい子の立場とはどういうことや、部落問題ってなんや、解放運動というのは何を大事にするんやという話をしてくれたりすることが固まってきたのかなと思う。

職員が一つになろうと、「考え方は別々でええ、手段で手を結ぼう」というところから始めた。だから二つ具体的な組織を創ろう。何をやるのかで手を結ぼう。人権教育を中心にした授業づくり学校づくり。地域と共に、地域みんなが応援できる事業。この二つで手を結べる。

友だちからサーバントリーダーという考え方を教えてもらって、「あんた召使になり、あんたが全部お膳立てをして皆が活躍出来て知ってもらえるものをつくったらええ。手柄は『その人や』

ってしたらええ。『俺が校長や』って出てるかぎり、絶対うまいこと行かん」。そうかサーバントリーダーかっこええなと思ってあちこちで言ってるが、みんなからは営業部長と呼ばれている。

中学校区には、人推と管理職がメンバーとして出る中学校区連携事業というのがあった。授業を見合いしている。問題作ったのもそこで中学校勉強困ってるという話があった。3小学校1中学校と幼保で人権教育を大事にした授業づくりをしようという連携事業がある。

一報告4ー②

また集会所で集まって話さへん?～私にとってのつながり～
(三重県人教)

一主な質疑と意見一

福岡 ①お母さんが学校にゲストティーチャーとして来て話すことで報告者自身の立場も明かされることになると思うが、先生方の配慮とか分かる範囲で教えていただきたい。②Bさんへ、Bさん自身報告者につながることで、部落問題との出会い直しだったり学び直しがあったと思うが、ご自身の家族とどう向き合ったか聞かせてほしい。

高知 児童館というところで解放子ども会の指導員をしている。報告者は、5年生の昼休みに先生に会議室に呼び出されて、部落差別について話されたということだが、私たちは小学校1年生から教育集会所で子ども会をやってきて、自分たちが住んでいるところは部落だということを教えていくが、そういう集会所のような場はなかったのか、また、何回で自分がそれを理解できたのか、それと中学校の時にBさんとのことで経験されたことを私は45年前に経験した。45年前にあったことがこの町内でもあるということがすごく驚きで、町の啓発がどうなっているのか知りたい。

報告者 ゲストティーチャーとして来たとなった時、先生から「お母さん来て部落のこと話すけど、あんたは大丈夫?」と聞かれた。けど自分はよく分かってなくて、先生から聞かれることが「えっ、なんで、別に全然うちのおかんが来るの恥ずかしくもないよ」という感じで、話してもらっても大丈夫だった。

5年生の時に初めて会議室で聞いたということについては、低学年の時に教育集会所にたまに勉強をしに行っていたが、深い理由があったわけではないが、行かなくなった時期もあった。集会所で差別とかについて聞いてきて、文化祭とかでも取組を小学生ながらに見ていいなあと思いつつ、直接部落差別をぼくらの地区が受けているというのは小学5年の時にはっきり聞いた。薄々は関係あるなと思いながらだったが、低学年の頃から人権とかのことについては聞いてはいた。

集会所とか地区の小学校がどういう取組をしているかはあまり分かってなくて、僕自身が教育集会所で小学生とかかわりを持つ中で、そういつ

た話がこれからして行けたらと思っている。

三重 教育集会所からきたBです。自分の家族との関わりということで、最初僕が遊びに行くといった時に、おばあちゃんにあかんとと言われて何でなんやろと思っていたことが、先生との話で、部落差別ということを知った。部落差別って自分に関係ないもんやと小学校の頃からずっと思ってきて学習などもろくにしてこなかったのが、自分のおばあさんが差別をしてると知ったときにすごいショックやったのと、自分の友だちが差別をされたということがすごくいやで、そこから人権学習に参加するようになっていった。それを僕のおばあちゃんによく思ってないみたいで、放課後の人権学習で帰りが遅くなった時に、「帰り遅いやん、何しとったん？」と聞かれた時に「人権学習しとったんや。」というのにも結構勇気がいった。言ったときに「そんなん関係ないんやで、行ったらあかん」と言われて、一回行くのを止めさせられて、行けんこともあった。

教育集会所コースというのが修学旅行で会った時に、報告者に誘われて、そこからまた参加するようになった。そこでまたおばあさんと喧嘩をしたり、それ差別やんという会話があったりするなかで、僕のおばあちゃんが最大の敵というか、大きな壁が今でもある。ここに来る前にもおばあさんから、「仕事休んでまで行くことなん。あんた関係ないんやで」とまた言われて、「いや、関係ないことないやん」「関係ないやん」の口喧嘩になった。じゃあ誰が差別しとんのという話で、それはうちのおばあちゃんが実際しとったことやし、昨日話したときも「差別なんかしてないやん」みたいに言ってくる。「じゃあおばあちゃんが中学校の時に言ったのは差別でないの？」と聞いても、「部落が危ないとこやと言われてきたのでそれを言ってるだけ」と言ってきて、「だから昔のことを言って、今も僕の友だちのとこ遊びに行ったらあかんというのには差別やん」と言っても全然分わかってくれない。

やっぱりこうして活動して行って認めてもらうことかなというのと、おばあちゃんだけでなく、僕らの後輩に差別を残さない、若い世代からなくしていけたらといいなあと思って活動している。

三重 地区の啓発について、中学校には4小学校から来ている。地区以外の3小学校からくる子たちの親世代の差別意識はまだまだある。今回のBくん様におばあちゃんを通した形で子どもに影響がいつている。彼の場合はおかしいと気づいて立ち上がっていったが、子どもの中には親等からの刷り込みによって偏見を持っている子は何人かいた。中学校としては部落差別はあり、根強く子どもたちに刷り込まれている可能性はあるというスタンスで、だからこそ地区の子どもたちは鍛えていく、他の子たちには、部落差別のおかしさを実感させるために年間かけて仲間づくりをしてきた。

三重 彼らがいる教育集会所のすぐ近くの小学校に勤めている。子どもたちに社会的な立場の自覚をいかにさせていくかというのがずっと課題になっている。地区の6割の子どもたちが通ってきている。地域によってはそれぞれの家庭で話をしてもらおうとか教育集会所や児童館などで自覚をさせていく取組もあろうかと思うが、地区では、小学校が大きな役割を担っている。家庭訪問を繰り返して保護者をつなぎ、高学年になった時に社会的な立場を自覚させていく。保護者が自分から話すという家庭もあるが、寝た子を起こすなどという保護者も多い。子どもたちに十分伝えられにくい家庭については、保護者とじっくり話をしながら学校で立場を自覚させている。

「会議室に呼ばれて」の話もあったが、保護者と十分話をしたうえで、子どもら同士が話をする中で社会的立場をしていったと思う。ゲストティーチャーとして学校に来た件も、クラスの中の子どもたち一人一人の立場を明らかにしながら学習をしたうえでの取り組みだったと思う。

滋賀 一部の現状を見て悪いイメージを持つ人がいる。二人が、本当のことだったり、正しい知識ということについてどう思っているのか聞きたい。

報告者 Aが危ないというふうを感じるのも、親からだと思うし、そのことが間違いであると気づく機会に出会わなかったということが大きいと思う。間違ったイメージを持つ人は、本当のことを知らないこととか正しい知識を学ぶ機会がなかったことだと思うが、地区の人といっても別に普通の人間だし、いい人もいれば悪い人もいるやろというだけの話。まず知ってもらうことが大事かなとAと関わる中で思っている。どの地区も平等で同じだろというのがここでいう本当のことに当たるのかなと思っている。正しい知識って何かというと、知識として部落問題を知っておくというのは大事かなと思っている。部落問題に限ったことではなく、差別をもしかしたらどこかで僕自身もしてるかもしれない。部落問題について集会所でも学ぶ機会はあったが、今ある差別について全部知っているわけではない。「本当のこと」「ただしい知識」この二つをしっかりと地区内外関係なく分かっていくことが大事だと思って書いた。

報告者 ほとんど同じ意見だが、「危ない人」というイメージがつくという話は自分自身も結構耳にしたことがある。本当のことを知らないの本当のことというのは、そのままなんだけど僕らの地区は危なくはない。ほかの地区もそう。家から出た時、出会うおじいちゃんやおばあちゃんも結構声をかけてくれて、コミュニケーションもとれかわいがられている。当事者として怖がられているのではないかという不安もなく、僕と出会ってきた人にも僕は危ない人間だとは思われてないと思う。こういったイメージがあるということも事

実なので、つながりをつくって話をする事でちょっとでも変えて行けたらと思っている。

熊本 高校で教育集会所と離れて学習の機会が無くなっていく子と違って、なぜ、拘って今も続けていけているのか。高校の時に解放教育に関わっていたのか教育集会所に目指す人がいたのか聞きたい。

報告者 高校の時は人権問題について話す機会が減った。中学校の時に話してきたことがいい経験になって、それが自分たちの中に残っていて、それがきっかけでもう一回集まりたいと思った。中学校の時に出会った先生の存在が大きい。先生自体が自分の話をしてくれた。その話を聞いて先生との距離が近くなって、僕も自分の話をしたらBや他の友だちともつながりができた。中学生教室と一緒に参加してきた仲間というのが今の活動の力になっている。

報告者 先生がしっかりサポートしてくれた。中学生の頃にしっかり先生と話せたこと、先生が自分の話をしてくれるということが大きくて、人権の授業でも別に硬くならず、有りのままの自分を出す先生を見てたら、抵抗なく入りやすかった。先生が構えてしまうと生徒も構えてしまうし、入りやすい環境があり、先生との距離が近かった。高校では先生との距離が一気に離れた。先生と自分のことを話す機会はずがないという状況で、中学校でやっていたことを忘れるのではないかというくらい何もなくて、そんな思いで大学に入り、集会所にバイトというかたちで働かせてもらう中で集まろうということになった。

Ⅲ 総括討論

協力者 「学ぶことでつながる、つながることでさらに深く学ぶ」ということを基調でいったが、皆がつながってみんなが学んで差別のない社会をつくるということではどんなことができるのか、提案した3つの柱を中心に交流したい。

兵庫 40数年前、新しい学校ができる時、部落の子がくるんなら土地は提供できないという周辺からの反対があつて、その学校へ行かなかつた。その後、二度と差別のない学校をと市をあげて新しい学校ができた。部落の子集まるようにという校内放送で、本人の意識もないままに、学校が前に出て教えるような状況で、その反発もあり、「僕ら部落の人間なん？部落って誰がつくったん？」と教師に聞いたが答えられなかった。まず教師がきちっとせなあかんということからスタートした。私がおこの解放学級で30年間地域出身の指導者として勤務した。

そこで小学校の熱い同和教育に出会った。自分の親の仕事の胸張って言う授業があつた。泣きながら子どもたちに自分の人生を語る先生もいた。その10年後にまた新しい中学校ができたが、またそこで自治会ぐるみの反対闘争があつた。その自治会ぐるみで反対してるところに支部から行

くことになった。終わって怖くて逃げて帰った。子どもに、「今日こんな怖い集会所があつた。あんたらそんな学校に行くねんで。今の学校におり」というと、娘は「えー何で、私がおこの中学校に行くから、差別あかん言う子をつくれるん違うん」と言った。小学校でしっかり同和教育してきたなかで育った。その中学校で反対署名をするものすごい運動をした人が昨日ここに座っていた人で、ものすごい差別者だった。でも今指導員してくれている。

Bのおばあちゃんとのやりとり聞きながら、おばあちゃんはどうかで自分の差別を認めてたいと思っている。彼を確かめていると思う。おばあちゃんは「あんたすごいな」って言いたいけど言われへん自分がいる。

今年行かせてもらったとこの6年生のが「おばあちゃんとお会って。すごいな、私もあんな大人になりたいな。でも今からでも間に合いますか」って書いている。「十分間に合うよ」と答えながら読んでけど、いくら歳いっても部落問題自分の問題にするのに間に合うので皆さんしっかり頑張りましょう。

愛媛 同和教育を受けてきた世代だが、同和教育を受けたという意識がない。職場学習での学習もサボっていた。寝た子を起こす的な考え方だったが、PTAの事務局をする機会があり、その中で運動団体の会長と出会うことができた。5年間ずっと一緒に、差別の話や自分がやってきた運動の中の話がすごく重くて、そこから同和教育について真剣に考えるようになった。人との出会いが宝であつて、つながりが大事だと感じた。先ほど小学校6年生の子が、今からでも間に合いますかと言つたという話があつたが、私が出会つたのは31、2歳の頃でそれまでずっと眠っていた。いつからはじめても遅くないと今思っている。

鳥取 3年前に帰ってきて隣保館の館長になった。学校で同和教育は受けていない。それまでに差別を受けた経験とか実感が無い。今回初めて全人教大会に参加した。特に午前中のBさんの話に感動した。部落問題を解決していくのどこに視点をおくかということ、Bさんの話だと思っている。差別する側が、差別してないよという認識で差別してることに気がついていないことが問題だと思う。

学校現場で苦勞されて今の活動につないでいったという時に、行政とか教育委員会の協力がどのくらい得られたのか聞きたい。

報告者 ある市では、15年以上前に校長が、差別問題をめぐって教育委員会と現場と保護者のはざ間に立って孤立し、あと一年の退職を待たずして先祖の墓の前で自死をするという忘れられないことがある。教育委員会は助けてくれない。だからこそ、地域の親に味方になってもらう。手を結ぶのはやっぱりしんどい思いをしながらも前を向いてる親だと思っている。たくさんの教師

が辞めていったりもした。学校が荒れて転勤してそれがトラウマになって行く先々でつぶれていくのを見てきた。出て行った先生が笑って遊びに来れる学校をつくろう、絶対ええ学校つくろう。とやってきた。必死になって荒れる子どもや分かってくれない親の家に足を運ぶ職員を見て、その人と同じ仕事をしていることは私の誇りであったし、いつもそういう時は水平者宣言を読んだ。そんな風にしてみんなやってきた。ただ、それを認めてくれた人も行政やと思っている。金銭的な応援であったり、人的な応援であったりという話し合いを持ってくれた。

協力者 我々の取組で行政が変わっていくことはすごく大事だと思う。私も今すごく感じている。だから、皆とつながりながら、保護者、地域、共によくしていこうとする人がつながることで、行政教育委員会も変わっていくと信じて取り組んでいる。

高知 小学校1年生の時から、地区に足を運んで、地区を身近に感じる取組をしている。5年生では漁業について6年生では親の被差別体験をきく。中学校では1、2年生では職業、3年生では結婚差別のことをやって、一昨年は人権集会で結婚差別についての劇をした。子ども会の子だけではなく全校生徒で取り組んだ。そのことを昨年全人教大会で発表した。町ぐるみで人権とか防災をやっている所で、青年の活動もあり、子ども会もずっと解放学習をやっている。うちの地区はずっと小学校も中学校も行政も一緒になって、保護者会もしっかりしているし、ずっと継続して来ていることが今の町全体の啓発につながっているということを実感している。

岡山 市役所に勤めている。職員研修でも自分には関係ないという意識があった。異動で人権部門になったときも、戸惑いのほうが大きかった。福祉行政に携わっていた時には、まさに目の前の困っている人のために仕事をしているという実感があった。今の部署に移ってきた時に、自分は誰のために仕事をするのか具体的なイメージが全くもてなかった。これまで私自身、同和問題を直接見聞きした経験がない。今日の話にあった、自分は差別していないという意識が間違いなく自分のなかにもあった。差別をするかしないかではなく、差別になるのかならないのかということころを、行動を起こす時自分自身に問いかける必要があると感じた。

奈良 最近近畿圏の大学生に対して行った部落問題に関するアンケート結果を見る機会があった。部落に対してどんなイメージを抱いているかというところ、「差別は絶対したらあかと強調されていた」「結婚差別等の厳しい現実が伝えられてとても暗い厳しい悲慘な印象しか残らなかった」「近くに部落がないから部落問題のことはよく分からない」など多くの学生は、現実の部落の姿が捉え切れしていない。地区外の人との結婚の比率

がものすごく高くなっている。周りから祝福されての結婚や反対を乗り越えての結婚の事例もたくさんある。そういう現実も正しく伝えきれているのか、本当の部落の姿が学校の教材の中で伝えきれているのか、部落問題学習の構築のし直しがあるのでないか。家族や身内の中で差別的な意識が伝えられた時に「それは違うでお母さん」「それは違うでおばあちゃん」と返せる子どもたちをつくっていかないといけない。

三重 Bright Bandersは小中高みんな一緒の子が多くて、私は小学校5年生の頃に部落ということ初めて知った。勉強の一環として聞いていただけで、実感がなかったが、中学校に入って遠出することがあって、たまたま会ったおばさんから「どこから来たの?」と聞かれ、「となりまちです」と答えたら「そのどこなん?」とまた聞かれて、濁して場所を言わなくてもやもやしたまま帰ってきた。地区学とかでその話をして、まだ差別があるんだなと思ってから、自分事として考えるようになった。中学校では先生たちが一緒になって考えてくれたり話し合いの場もたくさんあったが高校では環境がガラッと変わって話す機会が全然なかった。話していくことが大事だと思って、高校で仲良くなった子に、「私部落なんだけど」と話しても「全然気にしなくていいよ」という感じで話しても捉え方が違うというか、全然距離が縮まらなかった。大学でも、何回も家に遊びに来ている仲の良い子に話をしたが、初めて聞いたみたいで、へえーみたいな感じで終わって寂しかった。真剣に聞いてくれる子も勿論いたし、一緒に考えてくれる子もいたが、「今は部落差別ないよね」という感じで、まだ自分の話をしていない。

グループに分かれて、高校の先生たちと話している時に、「自分の学校には被差別部落の子がいないので、取組がしにくい」みたいなことを言っていて、いなければなくていいの?と思ってばーっと言った。関係ないからやらないというのはいやだと思っている。今、大学4年生で来年運が良ければ教師ができるので、こういう活動を自分から発信していきたいと思っている。

協力者 私は学校の教員。今言われたことは大阪市でもある。いるかないかではなく、差別の現実があるということを知って全ての学校でやる。被差別部落のない学校はあるが、差別のない学校はないということで帰ってこの話を伝えていきたい。

滋賀(協力者) 今教員してるけど、昨年度まで5年間隣保館でお世話になった。付き合いがある大学生がこの前来て、大学になって連れにしゃべってみたが、その連れは「部落って何なん?」というところから聞いてきて、しゃべる気がなくなって付き合いが離れていった。そういう現実があることを突き付けられて、ショックを受けている。多分彼女もそういう状態になるのかなと思った。

中学校教員としてできることを考えているが、やはり語る場をつくらなあかんと考えていて、部落問題に限らず、語れることをしゃべりあおうという場をつくっている。少しずつ自分のことを語り合う場をつくるのが大事だと考えている。

大分 別府の学校で人権を担当している。2本目のBさんのおばあさんの「私は関係ない、差別していない」この言葉が、差別というものの全てを表している気がする。私自身も知らず知らずのうちに差別をしていないという立場で差別をしまっているのではという反省をした。差別をしていないと思って差別をしていることが差別なんだということに気づいてもらえる取組を考えていかなければいけないと思う。特別支援学校に勤務しているが、部落問題だけでなく、全ての差別の解消に結び付けていきたい。

三重 Bright Banders に所属している。中学校数学の教諭として採用されたのに、特別支援学校への勤務を命じられ、なぜ特別支援学校の勤務なんだという思いをもってスタートした。保護者や行政、勤務している先生と話していく中で、自分の差別心と向き合えた。

BBのみんなが、三重県の大会で地元報告ということで発表した。自分を語ってつながるとか差別を自分事にするとか怒りを持つとか、言葉はよく聞くがそれ自体が具体的にどういうことなのか自分の中に落ちてこなかった。自分を語ってつながるといことがどんなことなのか一緒に話す中で、自分もそうなりたい自分もそんな仲間が欲しいと思うようになった。

自分の辛さを出す中で、自分の思いを返してく、そういう中でお互いの背景を知って、深い付き合いができる。だから、今の職場で安心して自分の思いを出せるし、毎日来て子どもたちと向き合いたいと思っている。

三重 教員10年目になるが、被差別当事者の思いを分かろうというのがずっと分からなくて悩んでいた。研修の中で、自分の問題ということで考えた時に、ずっと伏せてきた問題がある。双子の息子がいるが、不妊治療で体外受精という手段で授かった子。僕たち夫婦はこのことを誰にも言わずに過ごしてきた。両親も知らない。話すことで周りの目が変わるんじゃないかとか、何も悪くない子どもたちが違った目で見られるんじゃないかという怖さもあった。去年不妊治療をテーマにしたドラマがあって、自分の両親がそれを見て実家に帰ったときにその話題になり、親は知らないし親が何を言い出すか怖くてたまらなかった。たまたま差別的なことは言われなかったが、もし否定的な言葉を投げかけられていたら自分は言い返せただろうかと思うと自信がなかった。そんなことを研修で自分と向き合うという時に、自分の問題として見つかった。いざそのことを研修の場でしゃべろうと思っても、絶対に否定するような仲間じゃないんだけど、それでも怖く

て。そうやって自分に向き合った時に、もしかしたら今までで考えてきた差別に苦しんでいる人の思いというのは自分の今の思いと重なるのかなと感じた。自分に向き合った時に初めて自分事になったということを実感した。

IV まとめ

Bさんから「どうやったら克服できるか」という提起について。兵庫のおばちゃんと言ったように、ばあちゃんからのエールで、頑張れという励ましの言葉なんだと捉えることとばあちゃんの話聞くことが大事。「何でそんなふうにするの？」そこにはきっとそこには何か訳があると思うので、そのことを聞いていってもらいたい。そうすると少し見方が変わってくる。

僕は高校の時に小国の被差別部落がどこにあるか教えられた。集会所の学習会に通うようになって、部落問題との出会いをきっかけ、高校の時にこういうふうにならな腹が立った。とても悔しかった。そこには僕が大事にしている友だちがいて、同じ野球部でエースで、頼れる存在。その彼が傷つけられたような気がした。そういう話をしたら当時の推進教員から「何で腹が立ったと、そんなじゃないからなん？」と聞かれ、それに答えられなくて、それから僕の部落問題学習が始まっていく。

小学校5年生の時に5枚年賀状をもらって書いた。一人住所が分からなくて母親に聞いた時、とても困った様子でなかなか教えてくれなかった。知ってるけど言わないという感じだった。最後に教えてくれたがその時のイメージが良くなって、そのことも引かかっていた。

学校では低学年から積み上げた人権課題を6年生になって人権フェスティバルのなかで、人権劇として披露する。3人の息子も出演した。大人は何もせんでいいのかという意識が芽生え劇団光座を立ち上げた。第1作目に水平社創立大会ができるまでの物語をやった。みんな感動してくれた。その2、3日後にNHKの歴史が動いたという番組で水平社創立大会までの物語がドキュメンタリーであり母と一緒に観た。光座での講演内容とほとんど一緒に、それを見終えた後に母が「私がここにお嫁に来て、ばあちゃんからよう言われよった。『あそこに行ったらライをもらってくるけん絶対行ったらいかんばい』と、あんまりしつこく言うもんだからそうかなと思よった」という話をしてくれた。そこで謎が解けた。年賀状で住所を聞いた時、何で素直に教えてくれなかったのか。母もばあちゃんから伝えられ、自分の中で本当のことを確認しないままずっと暮らしてきたということが分かった。それまでも両親には部落問題を分かってもらおうと会話をしてきたがなかなか分かってもらえなかった。光座を立ち上げ見に来てくれて、そういう言葉を母から聞いた時に、誰かにやらされるんじゃないでなくて、自分

のものとして活動続けていくことで、こんな言葉が聞き取れたんだなということにすごく感じた。その時母に「そのことがずっと言えずにきつかったね。」という、やっと胸がスツとしたという話をしてくれた。

差別というのは家族を一番先に攻撃する。「万吉をここに産んだのはこの母さんたい」と母親が万吉に謝る場面がある。先ほど最後に、「なかなか親に言えない、どんな風に思われるか分からない」という発言があった。いろんなところで差別というのは家族を引き離そうとして来ると感じている。

レポートの中の「本当のことを知らない事や正しい知識を学ぶ機会がなかった」ということがどれだけ大きな影響を及ぼしてくるかということを感じている。インターネットの情報に子どもたちは晒されている。大人が本当に正しいことを伝えていくということ、本当のことを知る場をつくっていくことが大事。そして学んだことを自分の半径5メートル、家族や職場の仲間や近くの人たちに伝えていくことが差別をなくしていく誰にでもできる取組。全人教大会に参加して皆さんと出会えて本当によかった。自分たちができることをきちっとやっていったら力強いものになっていくことを実感した。

人と人がつながり、いきいき活動する姿が多く報告された。それぞれの地域で地道に取り組んでいる人権のまちづくりの実践を交流しあうことで、参加した人たちが学習しあえてよかったと思える場面が多くつられ、つながり学びあうことができた二日間となった。